



札幌ごみ減量実践活動ネットワーク(さっぽろスリムネット)

“つなぐ、広がる、循環型社会へ”

～市民と事業者の3Rアクション～

報 告 書



受託事業者:特定非営利活動法人 環境り・ふれんず

目次

■開会挨拶 2

■さっぽろスリムネット 20 周年記念講演 3

■講演会（14：00～15：20）

札幌市が取り組む循環型社会づくり

講師 宮岡 完さん

札幌市環境局環境事業部循環型社会推進課長

日常の買い物から資源循環！

コープさっぽろと組合員のサステナブルな連携

講師 鈴木 昭徳さん

生活協同組合コープさっぽろ 組織本部 環境推進グループ長

牛乳パックリサイクルほんとのはなし

講師 平井 成子さん

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 代表

・トークディスカッション〔質疑応答〕

【 開催概要 】

●開催日時 / 2026年1月24日（土）14：00～16：00（開場13：30）

●会場 / ちえりあ 講堂（札幌市西区宮の沢1条1丁目）

●主催 / 札幌ごみ減量実践活動ネットワーク

●運営 / 特定非営利法人 環境り・ふれんず

●参加者数 / 66名



主催者

さっぽろスリムネット
委員長たなか まさみ
田中 正巳

さっぽろスリムネットは、自主性とパートナーシップを基本とし循環型社会への転換を図るため、市民の日常生活や企業の事業活動におけるごみの発生抑制、排出抑制、再利用、リサイクル等のごみ減量につながる具体的な活動を展開することを目的としています。



本日は、大変お忙しい中、「さっぽろスリムネット 20 周年記念講演」にお集まり頂き、誠にありがとうございます。また、皆様には日頃から札幌市のごみ減量・資源化にご理解とご協力を頂き、改めて心より感謝申し上げます。

さて、私どもさっぽろスリムネットは、平成 17 年 3 月に設立され、今年度で記念すべき 20 周年を迎えることができました。設立以来、市民・事業者・札幌市が一体となって、ごみを減らすための仕組みづくりや先進的なモデル事業、広報啓発など、その時々課題に合わせて数多くの活動を行って参りました。

本日、お手元の配布資料の中に、「さっぽろスリムネット 20 周年の歩み」という年表を入れさせて頂きました。

ふりかえりますと、設立当初は「生ごみ減量」を主要な取組の一つとして、北海道で生まれたダンボールコンポストの普及や生ごみ減量に関するリーダー養成などに力を注いで参りました。その後、レジ袋削減に向けた「マイバッグ」の啓発活動を展開したり、未来を担う子どもたちへの環境教育出張講座を開始し、環境かるたやごみ分別ゲームといった教材づくりにも取り組んできました。

近年では、国際的な課題である「食品ロス」の削減講座や、「海洋プラスチック問題」への取り組み、さらに、ご自宅のエコな片付け方法をお伝えする「元気なうちに 3R でお片づけ」セミナーの開催など、ライフスタイルに合わせた幅広い活動を通し、3R の推進を図って参りました。

20 年間の詳細な取り組みにつきましては、ぜひ後ほど、こちらの資料をご覧いただければ幸

いです。こうしてごみ減量に関する情報共有や意見交換の場として開催しているこのフォーラムも、皆様のおかげで今回をもちまして 18 回目の開催となります。

また、本日の開催にあたりましては、「北海道の容器包装の簡素化を考える連絡会」様よりご協力をいただいております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回のテーマは、「“ つなぐ、広がる、循環型社会へ ” ～市民と事業者の 3R (スリーアール) アクション～」です。20 周年という節目に、これからの循環型社会の実現に向けて、私たち市民や事業者がどのように連携し、アクションを起こしていくべきか、共に考える機会にできればと考えております。

本日は講師として、札幌市環境局より宮岡完様、生活協同組合コープさっぽろより鈴木昭徳様、全国牛乳パックの再利用を考える連絡会より平井成子様をお招きしております。

それぞれの立場から、現状の課題や、暮らしの中で無理なく貢献できる実践例など、貴重なお話をいただけるものと存じます。

本日の講演が、皆様にとって新たな気づきとなり、明日からの具体的な行動につながる一助となれば幸いです。

結びに、本フォーラムの開催にあたり、講師を快くお引き受けいただいた宮岡様、鈴木様、平井様に深く感謝の意を表しますとともに、このフォーラムが皆様にとって実り多いものになることを祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

講演者

札幌市環境局環境事業部循環型社会推進課
課長

みやおか ひろし
宮岡 完 さん

循環型社会の実現に向けて、札幌市における
3Rの取組やその課題についてお伝えします。



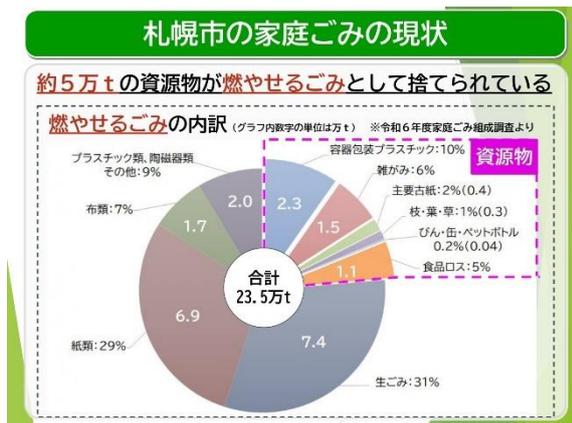
札幌市環境局循環型社会推進課長の宮岡と申します。今日は、オープニングセッション「札幌市が取り組む循環型社会づくり」というテーマで、札幌市の取組やその課題、市民のみなさまへのメッセージをお話しさせていただきます

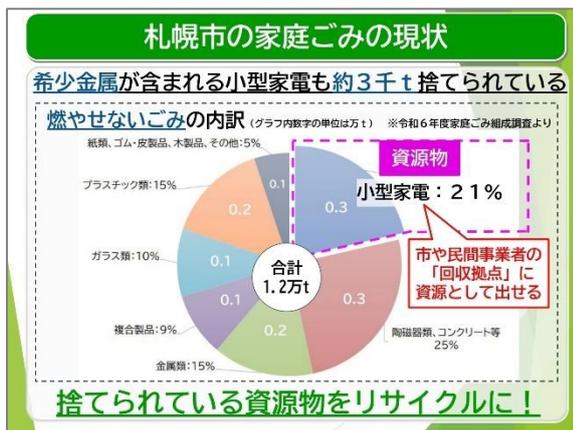
さて、まずはタイトルになっている「循環型社会」という言葉ですが、こちらは国の計画で定められている考え方で、「大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会」から、「持続可能な形で資源を効率的・循環的に有効利用する社会」へと移行していくものとされています。では、具体的に何をすべきと書かれているかということ、「廃棄物等の発生を抑制し、循環資源の循環的な利用を行い、適正に処分することで天然資源の消費を抑制する」、簡単にいうと、リデュース、リユース、リサイクルの3Rに取り組み、燃やせるごみや燃やせないごみを減らそうという内容になっています。つまり、みんなで3Rに取

り組むことが、循環型社会の実現につながっていくということで、これまで札幌市でも、3Rが市民のみなさまにとってもっと身近なものになるよう、色々と取り組んできたところ です。

そのうえで、市民のみなさまのごみに対する関心がどうなっているか見てみたいと思います。こちらは、令和7年度に実施した市民アンケートで、ごみの減量や資源化に関する市民意識調査の結果で、ごみ減量やリサイクルに関心がある人の割合は91.1%と極めて高い結果が出ています。しかしながら、全体的な意識は高いという結果は出ているものの、実際にはまだまだ浸透していない取り組みもあります。本日はこの市民意識調査の結果などを使いながら、循環型社会の実現に向けて、市が抱える課題と札幌市の思いをお伝えできればと思います。

さて、先ほど3Rで燃やせるごみや燃やせないごみを減らそうとお話しましたが、国や札幌市が3Rに取り組み始めてからしばらく経過していますので、まずはその現状を見てみたいと思います。こちらのグラフは令和6年度の家庭から出た燃やせるごみの内訳です。令和6年度の燃やせるごみの量は合計で23.5万tでしたが、ピンクの枠で囲われた資源物の量は約5万tに上り、多くの資源物が廃棄ごみとして捨てられてしまっていることが分かります。この資源物のうち、びん・缶・ペットボトルや容器包装プラスチック、雑がみなどは、ごみステーション





で収集していますが、びん・缶・ペットボトルは97%が正しく分別されているのに対し、容器包装プラスチックは56%、雑がみは57%しか正しく分別されておらず、4割以上が燃やせるごみなどとして出されてしまっている状況です。

続いて、燃やせないごみの内訳です。燃やせないごみの量は合計1.2万tであることに対して、資源物である小型家電の割合は2割程度、約3,000tが燃やせないごみとして捨てられています。この小型家電は希少金属を含んでいることから、市や民間事業者が設置している拠点で回収しており、リサイクルしています。このように多くの資源物が廃棄ごみの中に含まれているため、この資源物を少しでも多くすくい上げて、リサイクルに回していくことが課題の一つであります。

では、市民のみなさまがどのように資源物を処分しているか、アンケート結果からひも解いていきたいと思っております。こちらは小型家電を処分するときどのような手段を用いているかという質問の回答です。データを見ると、「じゅんかんコンビニ24」などの民間が行っている資源物の回収拠点を活用している方は54.0%に達し、前回行った令和5年度調査時の38.0%から16%も大幅に増加しました。一方で、「燃やせないごみ」や「大型ごみ」の日に出す人は5%（ポイント）以上減少しており、ごみとして処分するのではなく、資源としてリサイクルを行う人が増加したというふうに読み解くことができると考えています。「利用しやすい仕組み」があり、それが「認知」されれば取り組みが進み、ごみが減ることを示す良い事例だと思っております。

続いてもう一つ事例を紹介いたします。こちらは集団資源回収の利用に関するデータですが、利用しているという回答は53.8%で、前回の49.4%より4%ほど増加してお

り、こちらでも認知が進んでいると考えられます。

ただ、ご注目いただきたいのは赤字で書かれているところで、「地域で行われているかわからない」という回答が22.9%、また、「地域で行われているが利用していない」と回答した人のうち、利用しない理由として回収日がわからないが21.6%、出し方などのルールがわからないが20%となっており、利用していない人の多くは、ルールや取組自体を知らないということがわかります。

このようにリサイクルを増やしていくためには、認知度を高めることがポイントの一つとなりますが、もちろん、回収拠点の数が少ない、近くにない、出せる時間が限られているなど、利便性が低い状態であれば利用されません。

そのため、市としては暮らしの中で利用しやすい取組を整備していく、取組を認知し利用してもらうため、粘り強く周知啓発していくという2つの取り組みを並行して行っています。

ご自身が便利だな、良いなと思う取組については、是非ご家族やご友人、地域のコミュニティで広めていただくとより一層普及が進むと思いますので、ご協力いただくと大変ありがたく思います

事例：「捨てる」から「活かす」へ(リユース)

札幌市の取組

リユース収集 (リサイクルプラザ・リユースプラザ)

- ・大型ごみのうち、再利用可能な木製家具、自転車等をリユース品として収集し、清掃・修理後、市の施設で販売

【令和6年度販売実績】2,772点

リサイクルプラザの取組

- ・日用品小物のリユースコーナー設置、リユース食器貸出
- ・洋服・子ども服の交換会、着物やカレンダーのリユース市開催等

【令和6年度リユース実績例】
日用品小物11.2万点、洋服等1.9万点

続いて、リユースの話題です。みなさんご承知だと思いますが、資源物から原料を取り出し再び製品に加工するリサイクルよりも、同じ物を繰り返し使うリユースの方が環境負荷が少ないため、優先すべき取り組みと言われています。そのため、札幌市でも以前からリユースについて、様々な取り組みを行ってきました。その一つがリユース収集です。大型ごみのうち、再利用可能な木製家具、自転車、子ども用遊具類を収集し、市の委託業者による清掃、修理を行った後、厚別にあるリユースプラザと、ちえりあの1階にあるリサイクルプラザにてリユース品として販売し

ています。このリサイクルプラザは、ごみの減量や資源の有効利用に関する情報の発信拠点として、平成12年に開設した施設で、リユース品の販売以外にも、施設内で日用品小物類や衣類などを回収しており、小物類のリユースコーナーの設置や洋服の交換会といった様々なリユースに関する取り組みを実践しています。こうしたリユースの取り組みを始めた当初は、年間1,000点程の取扱いでしたが、令和6年度は13万点を超える品々がリユースされており、多くの方にリユースに取り組んでいただくきっかけが生み出したものと考えています。

また、近年ではリユース市場の拡大に伴い、これまで行政が担っていなかった分野においても民間事業者の進出が進んだため、事業者との連携に力を入れ始めています。その一つがインターネットを通じたリユースサービスです。市の取り組みの中にインターネットを通じて自宅からリユースができる取り組みがなかったことから、リユース事業者と連携協定を締結し、市のホームページにて、「ジモティー」と「おいくら」という、インターネット上のリユースサービスを紹介しています。また、(株)ジモティーは、昨年札幌市内に実店舗であるジモティースポットを開設していますが、一般のリユースショップでは買取されないようなものでも、まだ使えるものであれば無料で引き取り、店舗で安価に販売するため、市のリユース収集と同じく、ごみの減量効果が高い取り組みであると考えているところです。

このようにリユースについて様々な取組を進めているところではあるのですが、アンケート調査では、不要品をリユースショップに持っていく人は52.0%と半数程度、リユースショップで買い物をする人は26.5%にとどまっています。こちらも前回の調査よりは利用率が増えているところではありますが、

まずは「リユース品」を知る！



ブランド品などの高額なものだけではなく…

「まだ使えるもの」「意外なもの」がリユースできるかも！

まずは先入観を捨てて、店舗や市の拠点で…

リユース品を手にとってみてください！

札幌市としてはリユースをもっと身近で当たり前の取り組みにしたいと考えています。

そのためには、やはり知ってもらうことが重要だと思っています。左の写真は1階にあるリサイクルプラザです。取扱い品目はその時々で変わるため、いつでもあるわけではありませんが、食器類や着物といった、日常的に使える物から意外なものまで、様々なものがリユースされています。また、右の写真はジモティースポットの写真ですが、おもちゃやチャイルドシート、ベビーカー、子ども服といったお子さんの成長に伴って短期間しか使わないような商品は、リユース品としての需要が高いものになります。もし、リユースに抵抗感がある方がいらっしゃいましたら、まずは一度、市の拠点やリユースショップに足を運んでみていただきたいと思います。実際のリユース品がどのようなものか実感していただくことで、リユースに対する印象が変わるかもしれません。

課題解決に向けて

解決の鍵は「市民力」との連携！

- ・事業者とも連携しつつ、市は体制を整えて周知する
- ・しかし、最後の決め手は、
「家庭の中での分別」
「回収場所への持ち込み」
「リユース品の利用」といった

市民の皆様の行動 がポイント！

本日の講演を通して”意識”や”行動”を振り返ってみましょう！

これまで、市が抱える課題や市の取り組み等をご紹介してきましたが、市としては引き続き、事業者と連携しつつ、循環型社会に繋がるような様々な体制を整備し、周知していきたいと考えています。しかし、最後の決め手は、実際に「分別」や「回収場所への持ち込み」「リユース」を担う、市民の皆様一人ひとりの行動にかかっています。この後の基調講演では、毎日の暮らしの中で利用できるコープさっぽろさんのサービスや、牛乳パックリサイクル活動が家族や子供たちにもたらずメリットについて、ご講演いただきます。

本日のフォーラムが、循環型社会の実現に向けて、ご自身の意識や行動を振り返るきっかけとなり、一人でも多くの方が3Rに取り組んでいただけるようになれば、嬉しく思います。

ご清聴ありがとうございました。

基調講演① 日常の買い物から資源循環! コープさっぽろと組合員のサステナブルな連携

講演者



生活協同組合コープさっぽろ 組織本部
環境推進グループ長

すずき あきのり
鈴木 昭徳 さん

「環境に良いこと」を身近に始めませんか？
コープさっぽろの多岐に渡る環境活動をご紹介
するほか、毎日の暮らしの中で無理なく環境に
貢献できるサービスをお伝えします。



皆さんこんにちは。コープさっぽろの鈴木と申します。私の方から、コープさっぽろはスーパーマーケット事業を展開しておりますので、皆さんが参加できるような、買い物等を通じた資源循環の取り組みについて時間の許す限りご報告させていただきます。

最初に、コープさっぽろの簡単な説明をさせていただきます。コープさっぽろの正式名称は生活協同組合コープさっぽろで、1965年創立、今年で創立60周年になります。まさに還暦ですね。本部がここ「ちえりあ」からほど近い発寒にございます。組合員さんの数が、ありがたいことに200万人を突破しており、世帯構成でいくと北海道内の大体8割ぐらいの方が、家族の誰かがコープさっぽろの組合員になっている形になります。

事業としては、札幌にも28店舗ございますが、店舗事業のほか、トドック宅配事業、その他関連会社を通じた色々な事業を行っております。北海道の組合員さんのために問題

を解決していくというのが、コープさっぽろの役割になります。

なぜコープさっぽろは環境の取り組みを進めてきたのか。転機となったのは、2008年に開催された北海道洞爺湖サミットです。この世界的なサミットを他人事ではなく自分事として捉えました。当時の課題は環境、特に温室効果ガスに注目が集まっており、CO₂の50%削減等が議論されていました。これをコープさっぽろも意識し、自分たちで何ができるのかを考え、すぐに始めたのがレジ袋の有料化です。それを財源とした森づくり活動、省エネルギー、そして今回のテーマに近い資源回収の自前化という取り組みに繋がっています。

本当は時間があれば、どうして2008年から長年にわたり続けられたのかという歴史的背景もお話ししたかったのですが、そこは割愛します。簡単に説明いたしますと、コープさっぽろは1990年代の後半に経営危機を経験していましたが、組合員の方々が「北海道から生協を失くしてはならない」と、出資金の払い戻しを留まり、買い支えてくださいました。そのおかげで事業を立て直すことができ、一旦めどがついたのが2007年頃でした。そこから「今後は組合員さんのために還元していくんだ」という強い想いが背景にございます。

1. コープさっぽろ概要

(2) 環境活動のきっかけ

北海道洞爺湖サミット

正式名称：第34回 主要国首脳会議

開催日：2008年7月7日～9日

場所：北海道洞爺湖町

主要議題：地球温暖化

↓
2050年までに温室効果ガス排出量を50%削減

2008年に開始した環境活動

- レジ袋有料化
- コープ未来の森づくり基金
- 省エネルギー
- 資源回収の自前化

北海道洞爺湖サミットを自分事として認識



そのような流れで、2008年からレジ袋の有料化、森づくり活動、資源回収拠点の設置、環境教育施設である動物園の支援、製品製造時のCO₂排出量を計算するカーボンフットプリント、さらにはバイオマスプラントなどの取り組みを行ってきました。バイオマスプラントは、食品残渣（ごんさ）を活用したものでしたが、残念ながら事業的に成り立たず終了しています。他にも、私が立ち上げた宅配での古着回収、関連会社による電力事業、再エネへの取り組みとしてのRE100加盟など、ほぼ毎年何かしら新しい活動を継続して参りました。

2. レジ袋有料化
(1) ノーレジ袋運動 COOP

北海道ノーレジ袋運動を進める連絡会

- 2008年4月に設立（現 北海道容器包装の簡素化を進める連絡会）
- 消費者団体、行政・自治体、流通業界の3者で構成
- レジ袋の無料配布中止（有料化）

コープ未来の森づくり基金

- 2008年7月に設立
- レジ袋を辞退すると0.5円を基金に積立
- 北海道の森づくり活動に使用

2008年10月 レジ袋有料化

↓

2020年 7月 レジ袋有料化の義務化（日本）

北海道のレジ袋有料化は義務化される12年前に先行実施




5

皆様には説明するまでもないかもしれませんが、原点としては「北海道のレジ袋運動を進める連絡会」にあるかと思えます。消費者団体の皆様、札幌市を中心とする自治体の皆様、そしてコープさっぽろやイオンさん等の流通業界、この三者が構成員となりレジ袋の有料化を進めてきました。

法律では2020年にレジ袋有料化が義務化されました。北海道に住む我々としては、そのニュースを見た時に「当たり前なのになぜ今さら？」と感じたかもしれませんが、全国的には「自社だけ有料化して売上が落ちたら困る」という懸念があり、なかなか進んでいなかったのです。北海道の場合は、法制化の12年も前に自主的な取り組みによって実現していたというのは、素晴らしいことだと思っております。

その際、レジ袋を有料化する代わりに、天然素材の土に還るマイバッグを販売しました。北海道出身のデザイナー、梶原加奈子さんにデザインしていただき、現在は新規加入された組合員さんにプレゼントしています。これで私たちのポリシーが伝わればと考えております。その他、かつては中身が見えないよう銀色のポリ袋（シルバーバッグ）に入れていたものも紙製に切り替えるなど、環境配慮を進めてまいりました。現在、レジ袋の辞

退率は約90%を維持していますが、10%ほどの方はやはりレジ袋を必要とされます。

急に買い物が必要になった方や、家庭用のゴミ袋として使いたいというニーズもあります。そうした方のために提供するレジ袋は、バイオマス素材であることはもちろん、さらにもう一段踏み込み、食用に適さない古米等を使った「ライスレジ」製を採用しています。当初は本州産のお米でしたが、現在は東川町のお米に切り替えています。店舗に行かれた際は、ぜひレジ横の表示をご覧ください。手触りや強度も少し違います。

余談ですが、田んぼは一度潰してしまうと復活させるのが大変です。単にお米を作る場所というだけでなく、生物多様性を育む大事な資源でもあります。米作りを継続させるためにも、ライスレジのような取り組みは今後ますます求められるでしょう。レジ袋だけでなく、ライスレジ製のスプーンやフォークも、以前の無償配布から有料販売へと切り替えています。

次に組合員活動です。コープさっぽろが株式会社と大きく違う点は、事業と並んで「組合員活動」が大きな軸であることです。特に環境活動は、歴史的に組合員さんがリードしてきた側面があります。この写真は全道の組合員理事さんたちですが、地区の会議などで「プラスチック問題に対し自分たちにできることはないか」と話し合い、「ペットボトルを買うのではなく、マイボトルを持参しよう」という運動から始まりました。

その際に「トドック」のステッカーを作って仲間を増やしていくという、非常に組合員活動らしい素晴らしい広がりを見せました。これが2020年のことです。ただ、市民活動だけでは世帯や社会を大きく変えるのは難しいため、事業側もバックアップして全道的な取り組みにしようとなりました。コープさっぽろはSDGsを推進するプラットフォームの事務局を担っておりますので、その活動の一環として、2021年から「マイボトルエコアクション」を開始しました。

オール北海道で進めるべく、道庁で鈴木知事と記者会見を行いました。当時はコロナ禍で暗いニュースが多い時期でした。当初5月に予定していた会見は感染拡大の影響で延期となり、再設定したのが7月7日。後から気

づいたのですが、奇しくも北海道洞爺湖サミットが開催されたのと同じ日でした。この記念すべき日にアクションを開始できたことに運命的なものを感じます。鈴木知事も「久しぶりにポジティブな発信ができた」と、非常にこやかに会見に臨んでくださったのが印象的です。

3. マイボトルエコアクション
(1) 組合員活動

マイボトル運動

- プラスチックごみ問題の学習
- 自分たちにもすぐにできることは？
- ペットボトル飲料の代わりに、マイボトルを持参
- 「だから、マイボトルエコ宣言」を開始（2020年）

始まりは組合員活動

Handling out stickers to put on reusable bottles
This sticker is made from 100% recycled PET resin. The carbon is sourced from the surplus of the 4000-tonne weekly rice husk waste-to-energy plant. The plant is owned and operated by COOP.



マイボトルの課題は「飲み切ると補充できない」ことです。海外では給水スポットが普及していますが、日本はまだ遅れています。そこで、まずはコープさっぽろから始めようと、既存の純水供給機を改良し、マイボトルでも給水できるようにしました。組合員さんなら無料ですので、学生さんがお弁当と一緒に利用する姿もよく見かけます。また、新店等では試験的に炭酸水を1リットル50円で提供しています。専用ボトルを購入いただければ、非常に安価に炭酸水が利用できるボトルレスな仕組みです。

とはいえ、全てのペットボトルを否定するわけではありません。プラスチック容器は便利ですし、個包装は食品ロスの削減や保存性の向上に寄与します。軽くて丈夫という流通上の利点もあります。大事なのは「適切に使う」ことです。そのため、コープさっぽろではペットボトルの自動回収機を設置しています。この機械は投入されたボトルを粉碎・圧縮し、一度潰すと元に戻らないように切れ込みを入れます。これにより運搬時の容積を3分の1に抑え、物流の負荷（CO₂排出）を下げることができます。

3. マイボトルエコアクション
(3) 給水スポット

店舗の給水スポット化

専用ボトルのみ対応の純水供給機を改修

- 小型店を除くコープさっぽろ103店舗
- 350mlと600mlのマイボトルに給水が可能
- 炭酸水の販売機も試験設置

店舗で給水したいという要望に対応



さらに、回収したボトルを再びボトルに戻す「ボトル to ボトル」の水平リサイクルを推進しています。一般的な自治体回収では、ペットボトルの多くがプラスチックシートなどの別の製品になる「カスケードリサイクル」になりますが、これだとその次のリサイクルが難しく、最終的に焼却処分されてしまいます。大手飲料メーカーも2030年までの水平リサイクル100%を掲げていますが、私たちもこの循環を支えています。

マイボトルアクションの3つ目の柱は、5年前から始めた海岸清掃活動です。昨年は全道48会場で、延べ13,500人もの方々に参加していただきました。普段お取引のない企業様からも「参加したい」と声がかかり、輪が広がっています。参加のハードルを下げるため、ゴミ袋や軍手はこちらで用意し、「体一つで参加できる」ようにしています。また、昨年にはマイクロプラスチックの調査も取り入れました。砂をふるいにかけて小さなプラスチックゴミが出てくる様子を見て、特にお子さんたちが深く納得し、現場で学ぶ姿が見られます。

3. マイボトルエコアクション
(5) 海岸清掃活動

参加のしやすさ

- ゴミ袋を用意
- エコ軍手のプレゼント



さらに、街中でのクリーンアップ活動へのニーズも高く、10月には大通公園でも開催しました。昨年は1,000人を超える応募があり、会場のキャパシティの関係ですぐに受付を締め切るほどでした。一見綺麗な大通公園でも、徹底的に拾うとかなりのゴミが集まります。

3. マイボトルエコアクション
(5) 海岸清掃活動

Hokkaido街のクリーンアップ大作戦!

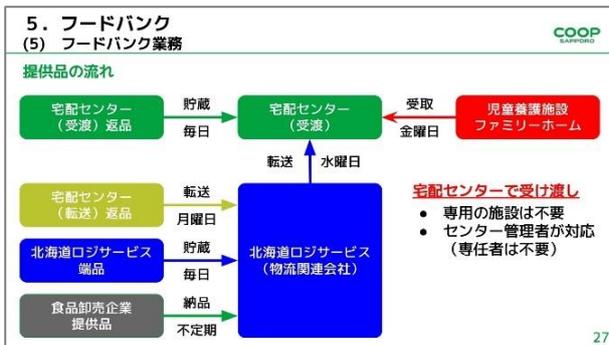
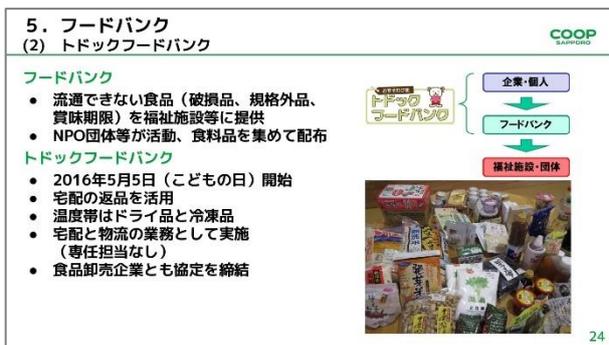


「YOSAKOI ソーラン祭り」とも連携しています。昨年は地元の高校生が清掃後に感想を発表してくれたのですが、若い方の言葉は非常に心に響きます。環境やサステナブルな取り組みは、まさに次世代のためのものです。大人が「偉そうに」語るのではなく、若い方が発信できる場を、我々大人が整えていくことが大切だと考えております。



資源回収の事業自体は2018年から本格化しています。江別市にある物流センターを拠点とし、全道の店舗や宅配センターへ配送した帰りのトラック（戻り便）に資源物を載せて戻ってくる「静脈物流」を活用しています。この仕組みにより輸送コストを大幅に抑えられています。

ポイントは、組合員さんの分別精度が非常に高く、高品質な資源として高く販売できるため、事業として自立できている点です。この利益は、コープさっぽろの収益にするのではなく、「ファーストチャイルドボックス（第一子へのベビー用品配布）」や「絵本が届く定期便」といった子育て支援事業の財源に充てています。年間約2億円の経費を、この資源回収の黒字で賄っているのです。「資源を出すことが、誰かの子育て支援に繋がる」という循環が生まれています。



最後にフードロスの取り組みです。2016年から、宅配事業で発生する受発注ミス等の余剰食品を全道23か所の児童養護施設へ無償提供する「フードバンク」を行っています。2024年は金額換算で年間約1億円、累計で6億円以上の食料品を提供しました。施設の子どもたち一人あたり年間約8万円分の支援に相当します。

駆け足となりましたが、以上がコープさっぽろの取り組む資源循環の現状です。ご清聴ありがとうございました。



講演者



全国牛乳パックの再利用を考える連絡会
代表

ひらい せいこ
平井 成子 さん

「牛乳パックリサイクル」の意外と知られていない「ほんと？」をご紹介しますながら、リサイクル活動に取り組むことで、家族や子供達にどのようなメリットがあるかお話いたします。



皆様こんにちは、今ご紹介いただきました全国牛乳パックの再利用を考える連絡会、名前が長いので全国パック連と覚えて頂ければと思います。代表しております平井と申します、宜しくお願いします。

私のお話の資料として、お手元にあるパワーポイントのプリントと冊子「牛乳パックリサイクルのほんとの話」と、それとお帰りになったらトイレのトイレットペーパーのホルダーに貼っていただきたい、このシールがあります。



もう一つ、動画紹介チラシがあります。お手元にこの冊子をご用意して私の話を聞いて頂ければ幸いです。

私たちの団体は40年ほどの歴史を持ちまして、単に長いだけというふうに思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、40年牛乳パック一筋でやって参りました。

その間色々な社会の変化の中で、これが今の牛乳パックの現状だということでお話させていただければと思います。

まず歴史ですけれど、ほんとの話その1として牛乳パック再利用運動ですが、実は牛乳パックリサイクルは「もったいない」ということから始まりました。

1984年に、日本は資源のない国にもかかわらず、上質なパルプを使用している牛乳パッ

クは、その当時ワンウェイ容器と言われる使い捨て容器だったんです。しかし非常に上質なパルプを使っているということを知ったので、モノを大切に作る大人の姿を子どもに示す、その実践運動の一つの手段として牛乳パックの回収を始めました。この回収の提案をしたのが私の母でした。

その一人の主婦の提案から全国的に広まっていきまして、それは『もったいない』という気持ちを子どもたちに伝えたいという、純粋な大人の願いといえますか、そうした心が日本全国に伝わったのでは、と思います。

1985年に、各地で回収活動が始まりますが、とにかく情報が全くない。しかも回収を始めた当時、牛乳パックは禁忌品で古紙の回収から外してくださいというものだったんです。新聞、雑誌、ダンボールは回収するけれど、その中に牛乳パックは入れないでねという禁忌品を集めてしまった。その責任を感じて、私の母はとにかく情報をたどって奔走して、なんとか受け入れ先が見つからないかと探して探して、ひとつの製紙メーカーさんにたどり着きました。

その情報が全国に広がって、各地でも牛乳パックを集めようっていうことになったわけですが、リサイクルするための情報がないものですから、横のつながりを作ろう、ネットワークの中で情報を共有化して、各地でその運動を進めていこうと、11団体で全国パック連を発足させました。

基本理念は『緑の地球を子どもたちへ、子どもたちに緑を残したい』、そのために牛乳

パックの再利用を通して物の大切さを伝えよう、消費型優先の生活を変えよう、自然と人間と共存していく、人と人との共生を目指していく、これを基本といたしました。

お気づきになったと思いますが、牛乳パックの回収率を伸ばそうという文言は一切ないんですね。むしろ「教育運動」から始まったというのが、これが特徴です。



↑これは当時の様子です。こんな感じで、みなさんボランティアで作業をされていました。各地でもストックヤードを見つけて、集めて、貯めて、貯めて、貯めて。そして他の新聞雑誌とかの古紙とも抱き合わせて2トンになったらトラックで業者さんに来てもらうという手法で、各地でそのような回収を始めました。赤ちゃんを背負ったお母さんも参加して、とにかく開いてないものもあつたり、洗ってないものもあつたり、それも全部チェックして集めるというようなところからのスタートでした。

ということで、市民から始まった特徴的な運動なので、牛乳パックの回収ルールについても「洗って開いて乾かして」は、市民独自で決めたルールとなります。結局、洗ってな



ければ臭う・資源にならない。だったら自分たち自ら洗おうよ。消費者が洗えば済むことじゃない、汚いものを集めてどこかで洗うよりかは、家庭の中でちょっとの残り水で洗えばいいじゃない、というような発想もありまして、洗って開いて乾かして次の人に綺麗に渡そうねという、このルールというのも牛乳パック再利用運動の特徴だと思います。

ただ、牛乳パックといえども、今いろんな飲料に紙パックが使われておりますので、お茶だったり、それからコーヒー牛乳だったり、ジュースだったり、中が白いものであれば牛乳パックと一緒に回収が可能ですよということも一緒に普及させていきました。

そして回収ルートも市民自ら構築してきました。回収拠点として、学校、スーパー、生協さん、町内会だったり、あと福祉事業所さん、郵便局とか銀行も回収拠点として協力いただきました。

回収拠点から回収業者を通して古紙問屋に行って、再生メーカーに行く。自治体のルートというのは始めた当初というのは本当におわずかでした。平成大合併前は3,232市町村ありましたが、その中で100自治体ぐらいだったんですね

ただ、2000年に容器包装リサイクル法が成立しまして、だいぶ取り組んでくださる自治体も増えましたけど、やはり今も強い回収拠点となっているのがスーパーさんですね。あと生協さん（*回収量は減少傾向）です。自治体は横ばいという感じです。

集団回収もありますが、徐々にその回収量は下がっているというような状況です。とにかくこういうシステムを作るのにすごくパワーとお金がかかる。でもそれをみんな市民ボランティアで全部築き上げて、成立した後は、中身・容器メーカーとかはそれに乗っかるだけでいいわけです。こんなおいしい話はなかったと思います。だったらもうちょっと早くから協力していただきたかったと思いますが、このような自主的に回収システムを作ったということでも日本独自の取り組みなので、海外でお話しさせていただくと非常にユニークだと言われました。

そして、単にリサイクル運動ではないということ伝えてきました。

牛乳パックは暮らしのレンズで、やっぱり社会を多面的に見る視野、視点を自分たち一

一人が持って、生活に戻った時にどういふふうに住生活したら環境に優しいのか、消費型じゃない生活なのかということを考える、このレンズだという風にずっと言い続けて参りました。

ですから、環境・リサイクルであったり、教育であったり、それから福祉であったり。生涯学習で高齢者の方々がご参加くださったり牛乳パックというレンズを通して、いろんな問題、物事に目を向けて、自分たちの生活を豊かにするというのが、この牛乳パック再利用運動の本当に根本なんです。

これも多分普通のリサイクル運動とは違ったことで、ここまで長く続けられたのは、こういう根底がもろもろあったからではないかと思っております。

そして牛乳パックを通して様々な人たち、立場の異なる人たちと出会い、環境問題というのは関係問題なんだなということもよく分かった歴史でありました。

始めた当時、牛乳パックっていうのは瓶より環境負荷なんじゃないかっていうふうによく言われました。

結局、木を切って作るんじゃないかと言われてたりもしました。その問題をクリアするために、北欧、北米の針葉樹の要するに牛乳パックの原料を作っている工場や山林に視察に行きました。そうしましたら、こういうことが分かりました。

50年サイクル（*北欧は100年サイクル）で健康的で生産性の高い山林森林を育成していた。伐採エリアは1年から5年以内に再植林を行っていました。そして森全体の美観に配慮して、やみくもに伐採するのではなく、ちゃんと計画的に伐採して植林してということで、しっかり循環がなされていた、こうしたことが、視察を通じて分かりました。これがほんとの話のその2になります。

ほんとの
はなし②

牛乳パックは環境に良い容器について

北欧・北米の管理された針葉樹が原料

- 50年サイクルで、健康的で生産性の高い山林・森林を育成
- 伐採エリアは1年～5年以内に再植林を行う
- 森全体の美観への配慮
- 環境への配慮
 - 野生動物、魚類生息地の保護
 - 湿原、考古学的に貴重なエリアの保全
 - 伐採時には動物が逃げ込むための山林や猛禽類の止まり木などを残す
 - 土壌を配慮し同じ種類の連作を行わない

環境にも配慮して、森の中には野生動物も住んでいます。川には魚がおります。ですから、必ずそこは保護する。湿原とか考古学的に貴重なエリアはちゃんと保全する。それから伐採時には機械が入るために、野生動物がびっくりしますので、逃げ込むためのエリアとか猛禽類の止まり木なんかを残しておりました。そして土壌を配慮し、同じ種類の連作を行わない。

こういった森林管理されている木材が牛乳パックの原料であったということがよく分かりましたので、やみくもに木々を切ってパックを作っているわけじゃないということも分かって、その後の出前授業で子どもたちに胸を張ってお話できました。この視察は本当に有意義だったと思っています。

紙パックの原料ですが、針葉樹であるダグラスファー（米松）とか、ウェスタンヘムロック、ツガの木の間です。それからパイン、マツの木ですね、ヨーロッパではトウヒですとか広葉樹であるシラカバも使っておりますけれども、ちゃんと森林管理されているということも分かりました。

ですから、決して牛乳パックは環境に悪い容器ではないということがよく分かりました。そしてさらに LCA の調査の結果で、これは業界団体の方でした調査なんですけども1リットルの牛乳パック1枚をリサイクルすると燃やすよりは23.4gのCO₂を削減できることが明らかになりました。

そして、学乳パックなどの小さい小型パックについては、燃やすよりは8.3gのCO₂削減につながるということが分かりました。また、瓶に比べて非常にたくさん牛乳を運ぶことができるということで、エコなメリットのある容器ということも改めてわかったほんとの話でございます。

牛乳パックリサイクルすると削減できるCO₂

1リットルの牛乳パック1枚
→ 23.4g

200ミリリットルの牛乳パック1枚
→ 8.3g

牛乳パックは一度でたくさん運べるエコなメリットも

紙パック入りの牛乳を運ぶと 97.3g

ガラスびん入りの牛乳を運ぶと 67.33g

紙パックは運ぶのに燃料が節約できます！

集めに行くとき茶色のパックが入っていて、それを分けなきゃならないんです。障害を持ったメンバーさんにとって、分けるという作業がまた一つ増えるわけです。そうすると作業量は上がって、回収量は下がっていくという、すごく悪循環になっています。こういうことをちゃんと協議しながら進めていくのであればいいんですけど、勝手にそれを進めていくというような、こうした暴走もあります。

それから、川上のメーカーさんがグリーン購入という観点で全然ゼロ。そして回収量の減少によって、結局今まで受け入れた製紙メーカーさんが原料の確保が難しくなったので、これだったらもうパルプ使っちゃえということで、パルプの混入量を増やしていく。そんな問題も起きています。

それと、ポリエチレンフィルムなどの残渣がどうしても出てしまいます。こうした残渣処理費の高騰でリサイクルすることにコストもかかるのだから、川上のメーカーがもっと協力すべきではないかと、こうした様々な課題を提起させていただいています。

それから、消費者の方が雑がみへ排出してしまっているということも大きな問題になっています。これは自治体の啓発不足も言えると思いますが、さらにいうと SNS とかで牛乳パックのまな板などの再活用方法をすすめていたりしています。「牛乳パックはまな板代わり、使った後は捨てるだけなので衛生的」とかですね、すごく大迷惑な発信をしているわけなんです。

非常に大事な資源なので、まな板にはちゃんとまな板を使ってくださいという話はさせてもらっています。やっぱりもっとわかりやすく、いろいろ啓発していかなくちゃいけないんじゃないかなと思ひまして、この動画を作りました。

その一つをご紹介させていただきます。これ2分ぐらいだと思いますので、見ていただければと思います。



二人) どうもマシンガンズです。

滝沢) 今日はですね、牛乳パックのお話をさせていただきます。

西澤) イエーイ、牛乳パック。

滝沢) 牛乳パックね。まあ僕らいろんな仕事やってますけども、これは大事なお話でございますからね。

西澤) 分かりました。しっかりと聞きたいと思ひます。

滝沢) はい。牛乳パックや他の紙パックとかのお話でございます。このグラフを見てください。実は最近ですね、牛乳パックのリサイクルが止まっている感じなんです。

西澤) あれ? そうね。

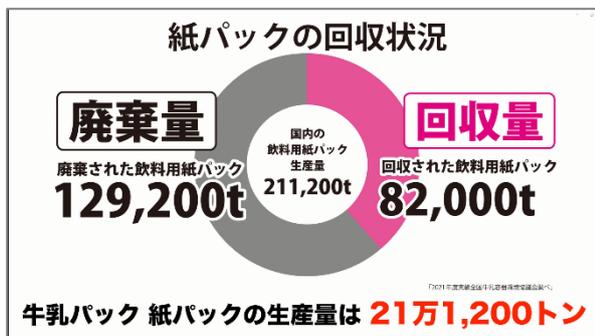
滝沢) というか、むしろちょっと、あれ? 下がってきてるぞみたいな感じでね。

西澤) 回収率が相当ダウンしてますね。グラフにすると下降気味という。大丈夫ですか。

回収率が下がってるって言うんですが、実際どれぐらいの牛乳パックが回収されてる?

滝沢) よくぞ聞いてくれました。こちらなんです。紙パックのですね、回収状況でございます。牛乳パック、紙パックの生産量はですね、21万1200トンでございます。そのうちですね、回収されているのは8万2000トンってことでございます。12万9200トンは捨てられているということになります。

西澤) 半分は当然としても、2/3ぐらい捨てられてんじゃないの?



滝沢) これ。これね、枚数にすると 38 億 7600 万枚の牛乳パックや紙パックが捨てられているということなんです。

西澤) 正直数字で言うとあまりピンときませんが、あれ、牛乳パックで再生するとトイレトペーパーに生まれ変わるんですよ。

滝沢) そこまで知ってたね。

西澤) だから捨てられてる、その牛乳パックでどれぐらいのトイレトペーパーが作れるんですか？

滝沢) これがですね、なんとなんとなんと 6 億 4600 万ロール。

西澤) 想像がつかないけど、相当なロール数よ。

滝沢) まあだからそれほどの牛乳パックが捨て

られてるってということなんですよね。

二人) これはもったいないね。本当にもったいない。

滝沢) 声が揃っちゃったね、俺らね。トイレトペーパーの 1 個作るのに必要な牛乳パックは 6 枚でございます。それで計算するとですね、6 億 4600 万ロールということになるんですね。

西澤) もったいないね。

二人) だからリサイクルしないともったいない。
(*ビデオ終了)

色々ありますので、二次元コードが入ったチラシ見ていただいて、ショートもロングもありますので、またご家庭に帰って見ていただいて、皆さん『牛乳パックもったいないらしいよ』というお話をさせていただいたらありがたいと思います。

何しろ ワンガリマータイさんよりずっと以前からこの牛乳パックリサイクルを「もったいない」で始めておりますし、SDGs のつくる責任使う責任での発想も含めて長年続いてきた牛乳パック再利用運動ですので、ぜひ今後ともご協力をよろしくお願いしたいと思えます。



全国パック連よりお知らせ

2023.10.31 YouTube チャンネルを開設し、マシンガンズとリサイクルをアップしました。
* 出演いただいた可愛いコンビ「マシンガンズ」は、今年 5 月にフジテレビで放送された漫才トーナメント「THE SECOND」で準優勝、相方の滝沢秀一さんは環境省サステイナビリティ広報大使に任命されています。

ショート

<p>トイレトペーパーはなぜ必要か</p> <p>53 回視聴</p>	<p>牛乳パックの回収ルール</p> <p>51 回視聴</p>	<p>いくつできる？</p> <p>39 回視聴</p>	<p>牛乳パックリサイクルのお話</p> <p>409 回視聴</p>
-------------------------------------	----------------------------------	------------------------------	-------------------------------------

動画 ▶ すべて再生

<p>牛乳パックで紙漕ぎに挑戦！</p> <p>276 回視聴・1 日前</p>	<p>牛乳パックの再生品つてやわらかい！</p> <p>136 回視聴・7 日前</p>	<p>牛乳パックってリサイクル巻！</p> <p>252 回視聴・2 週間前</p>	<p>飲んだ後牛乳パックどうしてる？</p> <p>611 回視聴・3 週間前</p>
--	--	--	---

ぜひご覧いただき、Good ボタンやチャンネル登録、リンク、拡散などご協力よろしくお願いたします。

企画制作： 全国牛乳パックの再利用を考える連絡会（全国パック連）
協賛： 牛乳パック再利用マーク普及促進協議会（パックマーク促進協）

コーディネーター

登壇者



環境り・ふれんず
代表
石塚 祐江 さん



生活協同組合コープさっぽろ 組織本部
環境推進グループ長
鈴木 昭徳 さん



全国牛乳パックの再利用を考える連絡会
代表
平井 成子 さん



札幌市環境局環境事業部循環型社会推進課
課長
宮岡 完 さん

オープニング・講演会の話を受けた会場からの質疑応答を通して、“つなぐ、広がる、循環型社会へ”向かうために市民と事業者が起こすべき3Rアクションを改めて問い直します。

<パネリスト> (五十音順)

- 鈴木 昭徳さん 生活協同組合コープさっぽろ 組織本部環境推進グループ長
- 平井 成子さん 全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 代表
- 宮岡 完 さん 札幌市環境局環境事業部循環型社会推進課長

<コーディネーター>

- 石塚 祐江さん 特定非営利活動法人環境り・ふれんず 代表理事



●石塚：ご紹介頂きました石塚です。基調講演、大変勉強になりました。

皆さんからたくさんのご質問を頂き、質疑応答で終わりそうなくらいの量なので速やかに進めていきます。

●石塚：最初に札幌市の宮岡課長に質問です。『超高齢化社会になっていくので小型家電の回収拠点が町内会の資源回収などで回収できるようになれば利用しやすいのに…と思いますが、リチウムイオン電池などの製品が増えているので取り扱いが難しいのかなと感じました。』

●宮岡：まず集団資源回収についてですが、基本的には、先ほど鈴木さんからお話が出たと思うんですが、廃掃法というごみの法律がありまして、基本的に許可を受けている人がごみの処理を行うというふうに定められているんです。その法令の例外の規定として、もっぱら物って一般的に呼んでいることが多いんですが、国の方で一般的に有価として取り扱われているものについて例外的にこの集団資

源回収などで回収をしていいですよというふうに決められています。

なので、品目がそもそも限定されているという状況にありまして、小型家電は現状対象になってないという状況があります。また、ご質問の中にもありましたが、リチウムイオン電池、非常に、取り扱いが難しい状況になっています。

国からも、基本的に対面回収で集めた方が安全じゃないかという話を頂いているので、確かに集団資源回収みたいな、回収して回る仕組みであれば対面回収に近い状況になるかとは思いますが、なかなかその取扱が難しいという状況があります。札幌市では市の回収施設であったり、家電量販店みたいな普段リチウムイオン電池を販売している会社に回収のご協力をお願いしており、そちらでは対面回収をして、札幌市の方で全部集めているという状況になります。

●石塚：続いて鈴木さんへ質問です。『給水スポットの衛生管理は？』

- 鈴木：もともと 2 リットル、4 リットルのタンクに問題がないような形で給水できる機器になっていて、出口のところもメーカーさんにそういったことを考慮して監修してもらっているので、問題ないかと思います。
- 石塚：はい、ご安心ください。続いて平井さんへの質問です。『牛乳パックはアルミをはがしても回収には適さないのか?』
- 平井：回収に適します。でも、なかなか消費者の方にアルミまで剥がして下さいとは、お願いできないわけですよね。中が白ければアルミを剥がせば紙パックと一緒に回収可能です。でも結構アルミに紙が持っていかれてしまうので、ペラペラな紙を出すっていうことになりますので、できる限り外れるようだったら外して頂ければありがたいですが、無理はしないでくださいという感じです。
- 石塚：続いて平井さんに『森林管理されている北欧・北米の様子は分かりましたが、日本でもそのように行われているのでしょうか?牛乳パックの原材料は北欧・北米の物が多いのですか?』
- 平井：その通りで、ほとんどが輸入です。北米北欧の原紙メーカーからポリエチレンを両面に貼った状態で、ロールにして輸入をしております。ですから、日本ではそこに紙容器メーカーが印刷をして、中身メーカーの工場で充填して成形するというのが工程になります。ただ、一部 TOPPAN さんがカート缶と言って、缶の形をした紙パックですが、あれについては国産材を使用していると聞いております。なので、ほとんどが輸入に頼っているという状況の紙パックです。どのように牛乳パックが家庭に届いているかということ等が今日お分かり頂いたかと思います。



- 石塚：木材も資源ですから、どのように牛乳パックが自分のところに届いているか、お分かり頂いたかと思います。
- 石塚：鈴木さんに『リサイクル事業の収益が子育て支援事業に還元されていることを初めて知りました。この取り組みの周知はどのようにされていますか?環境に良い取り組み以外にもこのように役立っていることが分かると、リサイクルの動機づけになるかと思いました。』
- 鈴木：宅配の場合には、年に何回か資源回収報告がありまして、回収量いくらでしたというチラシを入れるときに、必ずその収益や子育て支援事業に使われていますという報告をしています。店舗だと玄関入ったところに、必ず毎月一つのテーマの社会貢献の取り組みを報告しているんですけども、年に一回はその資源回収の取り組みが子育てに使われていますというようなポスターになっています。その他、通年の取り組みとしては、ホームページや SNS 等で発信をしております



- 石塚：こういう機会でもないとなかなか知ることができない情報ですね。良い情報は、周りにも広げていただきたいと思います。次も鈴木さんに、『リサイクル事業の資源の流れや話題の中に「ビン」が見受けられないようにみえました。ビンでの販売・流通しているものが少ないためでしょうか。各種の取り組みをされていて、素晴らしいと感じました。』
- 鈴木：瓶の場合、コープさっぽろの静脈物流の取り組みで、店舗から瓶を回収して安全に割れない状態で運ぶ事が難しいという点と、販売単価のところで売却して黒字になるかという赤字になります。コープさっぽろの組合員さんの出資金で運営しているので、赤字になってしまうような事業を率先してするわけにはいかないということと、瓶自体の流通量が少ないということです。ビール瓶等の直接店舗から業者さんが回収している一部のものについては回収をしております。

●石塚：平井さんに『牛乳の容器はガラス瓶から紙パックへ変わってきましたが、紙が最適なのでしょうか？ペットボトルやプラスチック容器は見たことがありません。理由をご存知でしたら教えてください。また、海外でも牛乳は紙パックなのでしょうか？牛乳パックから牛乳パックへの水平リサイクルはできないのでしょうか？』、鋭いですね…お願いします。

●平井：一部ペットボトルなどプラスチック容器に、若干乳製品が充填されてはおります。

農水省ではペットボトルの牛乳容器というのは承認しておりますが、乳業メーカーさんが充填する時の、多分コストの問題とか工程の問題だと思うんですが、今から乳業メーカーさんが紙容器から変更して設備するのかっていうと、やっぱり難しいかなと思います。

中小の乳業メーカーさんも多いですし、大手さんもペットボトルの場合、その場で飲み切るサイズの乳飲料だったらいいけども、移動したりしますよね。お茶と同じ感覚で。そうすると衛生的な問題があるので、なかなかペットに切り替われないというような話は聞いております。

海外ですと、アメリカはものすごい量を飲むので40入りのプラスチック容器です。ヨーロッパは紙パックですけども、未ざらし（漂白行程を省いた紙）が多いように思います。原紙メーカーさんで未ざらしパックを作った方が要するにコストダウンができるということだと思います。日本の場合はアメリカからとか、白い原紙を輸入しているので、コアレックス道栄さんみたいにちゃんと受け入れて、トイレットペーパーやティッシュペーパー、キッチンペーパーなど家庭用紙にできるという独自のリサイクルシステムがあるので、未ざらしは使えないということで、そんな紙パック事情です。



●石塚：では、ヨーロッパの未ざらしパックはリサイクルされてるのでしょうか？

●平井：リサイクルされていますが工業用です。工業用の芯とか。だから、日本みたいにもう一回家庭に戻ってくる製品にはなっていないんですね。どうしてもそのヨーロッパ全体で回してしますので、それもすごい汚いんですよ。



とにかくハエとか臭いとか、とんでもなく汚い状態で集められて、で、その原料を扱うのが嫌で辞めちゃった製紙メーカーさんもありました。だってそれを板紙にして、ピザの箱とか作ってるんですよ。視察に一緒に行った家庭紙メーカーさんも、こんなの使えないと驚いていました。

ですから、本当に日本の再生資源は綺麗だし、質も良いし、それからマナーも良いし、これはやっぱりね、ヨーロッパ方式をグイグイ持ってきて、壊しちゃったら絶対ダメだと思っております。

●石塚：これはきっと市民運動から始まって、市民一人一人が洗って開いて乾かしてが定着した日本の仕組みが、海外とは違うということですね。

●平井：あと、水平リサイクルが難しいのは液体を充填する液体用容器は強度が必要なんですね。リサイクルパルプというのはどうしても強度が保てないということがあるので、パック to パックにならない。あと衛生的な問題という点でも、パック to パックは難しいと思っています。

●石塚：次も平井さんに『牛乳パックリサイクルが一人の主婦の提案から始められたとのこと、素晴らしいと感じましたし、同じ日本人として誇らしく思いました。現在、牛乳パックや各種パックはリサイクルする材料として考えた場合、大きく何種類あるか教えていただけるとはでしょうか？ また、牛乳パックの再利用法はトイレットペーパー以外にも研究されているのでしょうか？』

●平井：紙パックの各種パックですが、屋根型の容器、中側が白ければ紙パックという分類になります。それからブリックパックと言いまして、レンガ型の格好をしていて、中側が白い紙パックがあります。例えば明治のおいしい牛乳の200ミリリットルとか、ブリックパックですけども、中が白いので紙パックになります。紙パックマークというのがついていますので、それを見て判断していただければと思いますけれども。

今ですね、アルミ付き紙パックに変わるものとして、ノンアルミで常温保存できるという紙パックを日本製紙で開発しまして、伊藤園で出ております。コンビニなんかの野菜ジュースのコーナーでエコパックという表示もついていますので、これは牛乳パックと同様紙パックとしてリサイクルいたしますし、これこそがやっぱり技術開発ということなんだなと思います。

そっちを本当にもっともっと進めていただければ、再生メーカーさんだって扱いにくいものを扱わなくて済むので、そういう新型紙パックも開発されていますので、ぜひお店でチェックしていただけたらと思います。

トイレトペーパーだけじゃなくて、やっぱり家庭紙が主流です。キッチンペーパーですとか、それからタオルペーパーとか、若干板紙にも再生されていますが、ご家庭で使っていただく用紙への再生が主流となっております。

●石塚：札幌市さんへ質問です『紙パックのリサイクルの普及啓発について札幌市はどのような取り組みをしていますか？』

●宮岡：そこまですごい普及啓発ができていくというわけではないと思いますが、札幌市のホームページの中に、資源物の行方についてまとめたページというのがあります。その中にいくつかの資源物が入っているんですが、その中の一つに紙パックが入っていて、そういった形でお知らせをしているというのがあります。基本的には拠点に持ち込みください、もしくは集団資源回収にお出しくくださいというご案内をさせていただいて、それでも難しい場合については、やはり雑がみに入れてくださいというお願いをしているというのが現状になります。

そういう意味では、先ほど平井さんの



方からも、やっぱり雑がみに混入するというのが非常に多いという話をしていたというの、なかなかそこに対してきめ細かい対応というのが難しい状況というのがあります。どうしても雑がみになると質の良い紙には再生が難しい、いろんな紙が混ざってしまうということで、リサイクル率が落ちていくという状況はあるかなと思っています。

ただ、やはりコストの問題もあって、良いものを作るためには細かく分別をして回収するというのが理想的なんですが、どうしても費用対効果を考えると、なかなか全てやっていくのは難しいというのが現状として挙げられます。

●石塚：次は鈴木さんへ『食用に適さない「古米」をレジ袋等に使っておられるとのことですが、備蓄米は「古古古米」でした。食用に安く売っていただくことはできないのでしょうか？その備蓄米も「古古米」「古古古米」も私は手に入りませんでした。また、脱炭素に反して中央区の資源回収はトドックの配達日ではないのはなぜですか？不便を感じます。』

●鈴木：難しいですね。うちは小売業者なのであくまでも備蓄米として販売できる状態で回ってこないと販売はできない、としか答えようがないと思います。

極力そういうのは必要になったとき、店舗で早めにある程度の量を確保して販売努力をしたというのをご理解していただきたいと思います。

資源回収の質問ですが、資源回収がもし別便のことを指しているのであれば、以前はトドックでお届けした時に回収をしていました。

ただ、今すぐ回収量も増え、配達をしながら資源物を載せるというのも難しくなってきた、合理化するために資源回収便というのを別日に立てたので、そこに合わせるのがちょっとひと手間です。

今までだったら出しておけばよかった

のが、少し面倒くさくなったというところはあるかもしれませんが、逆に別便にすることで、前は始めていなかった食器の回収というようなアイテムが増えてます。すごくカンボジアでニーズがあるんですよね。そういうふうに出す側も、組合さんも負担かかる分、新しいサービス、質を高めるということができています。

フードバンクの取り組みもこっちから届けるわけではなくて、取りに来ていただいている、お互いにコープさっぽろだけが頑張るのではなくて、いろんな方がそれぞれできることで頑張るってところで、世の中もう一段階レベルアップするのかなというふうに思いますので、ご理解していただきたいと思います。

- 石塚：食器を資源回収されているのは、コープさっぽろさんだけと言っていいのかな？もちろんリユースショップもありますが、資源として取り扱っていただくのはとっても素晴らしいと思います。

次も鈴木さんへ『コープ電気は何に何Kwh使われているか分かるシステムですが、とても良いと思います。各自宅の配線や機器などどうしてわかるのか不思議です。』

- 鈴木：不思議ですよ～これもちょっと関連会社のトドック電力のサービスなので、ちょっと私も100点の回答はできないんですけども、それぞれもちろん機器にメーターをつけて、測れば、使っている量って分かると思うんですが、実際そんなことしてないんですよ。

大元のところでトータルとしてどれくらい使ってるってような情報しか取れないと思います。それなのに、じゃあ個別にどうこうというのがわかるのかって、あくまで調べているわけではなくて、推定になると思います。

この時間帯で外の気温がどれくらいで、使っている時間がどれくらいで、上がり幅がどれくらいというようなデータがあると、今もうAIの時代ですよ。いろんな情報があって、この時間でこれだけピッと急にピークがあったら、恐らくそれはこういうことだろうというようなところで、このせいですよっていうことを、情報提示していると思います。

ちょっと私の答えってそこまででなんですけどね。

- 石塚：ご担当ではないので、そういった想定、換算しているのではないかということだそうです。

次に平井さんへ『聞き逃したかもしれませんが、ポリエチレンフィルムは牛乳パック類にあるのですか？どの部分に？』

- 平井：両面に貼ってあります。例えば、酒パックも紙パックとして出せるものがあります。アルミは貼っていない。それは中に樹脂（*ポリエチレンやポリプロピレン）が貼られています。でも、今の道栄さんをはじめとした受け入れ製紙メーカーさんでは、それを剥離する技術を持ってもらえるので、心配なく出していただけだと思います。

ポリエチレンの残渣はそれをエネルギー回収できている製紙メーカーさんもありますので、それができていないところなど、小規模メーカーさんは処理費の高騰が非常にネックになっているというふうなお話でした。

燃やせるから、サーマルリサイクルも可能です。両面に貼ってあるツルツルとしたところがポリエチレンで、その上に印刷してあるので、ポリエチレンさえ剥がれれば中の白い紙が取り出せるという、そんな構造になっております。

- 石塚：ちょうどその質問で『今は小さな飲み物に牛乳パックと同じものが使われていると思うが、赤い色が染みついているものは同じように利用できるのか？』…

これは、ポリエチレンに印刷されているので、赤いパックは赤じゃないですね。中は白ということだそうです。

続いて宮岡さんに質問です。『集団資源回収の回収効率が年々悪化している状況下、回収効率を上げる為、団体先（町内会、マンション）にECOボックスの設置を推進して頂けないでしょうか』

- 宮岡：具体的な質問をありがとうございます。札幌市ではやはり集団資源回収の仕組みをですね、積極的に活用していただ



ていまして、品目は限定されるんですが、奨励金として回収団体の方にお渡し

しており、できるだけ資源の方に回していただくという取り組みを進めています。実は、集団資源回収の回収団体の方は少しずつ増えていまして、今4,000団体を超えている状況なんですけれども、回収に来てくれる事業者さんは減ってきている状況がありまして、例えば最近で言うとバスとか、トラックも含めた運送というのは人手不足という問題が出てきていますので、だんだん回収するのが大変になってきているというお声はいただいている状況です。

できるだけ回収できた方がいいんですけど、団体が増えて、一つの事業者さんも、いろんな地域に取りに行ったりしているという状況がありますので、そうすると回収で非効率な部分があって、より負担が増えるという状況があります。今あった、エコボックスというのは地域の中に回収のボックスを用意して、そこに出していただく形にすると、いろんなところを回るんじゃなくて、取りに行く手間が、一箇所で済むというお話かと思うんですけども、そういうことを進めていくかどうかも含めて、回収している事業者さんの負担が増えている状況を、改善していくためにどういった対応をとるのかというところを、検討しております。できるだけ皆さんには引き続き資源の方を積極的に出していただきながら、ちゃんとしっかりと回収いただける状況を作れるように、検討したいと思えます。

●石塚：時間になってしまいました。たくさんのご質問をいただいて、本当に質疑応答で終わってしまいました。

最後に『それぞれ、取り組みを始めた頃と今との変化を教えてください。それぞれの取り組みの成果をどのように考えておられますか?』というご質問が皆さんに頂きましたので、これを最後の質問として、今日の感想も含めて一言ずついただいでよろしいでしょうか?

●鈴木：環境の取り組みを始めたのがちょうど13年前になります。

その当時、組合員さんの関心は食に対して高く、あまり環境は興味無いという方が多かったんですが、今、環境に関心ある方が増えてきています。それは2015年のSDGsであったりとか、環境問題を目にする機会も増えたのかなと思って

ます。

関心が高まればそれに付随した行動もあるんで、私は世の中良くなってきていると思ってますし、大学で講義も持ってますが、今の若い人たちは学校でそういった環境サステナビリティとか、そういった授業を受けているので、考え方自体がブラッシュアップされている。そういった世代が育ってきているので、世の中どんどん進んできているのかな。

褒める人ってあんまり声をわざわざ上げないんですけども、否定する人は一人しかいなくても声は大きいんです。良いと思ってもわざわざ言ってくれないので、どうしてもネガティブなことばかりイメージがありますが、世の中良くなって…。

一方で平井さんの話を聞いていて、牛乳パックの回収率が下がっているというのは、その関心が当たり前だと思いき過ぎていて、知られていないと下がっていくということもあるのかなと思ったので、情報提供をしてそれについて皆さんはどう思いますか?というような機会を提供するというのは、引き続きしていく必要があるなと思いました。

学びのある2時間ありがとうございました。

●平井：回収率、回収量は下がっておりますが、やはり40年積み上げてきた実績というのは、国の方には理解してもらっているんで、今検討会を開いているんですけども、製紙メーカーさんも国もそれから回収業者さんでもですね、みんな集まってくださって、いろんな協議をしているテーブルを現在持っております。

うちは、そういうテーブルを用意できるんだなと思って。業界団体はあるのに、全然そういうテーブルが持てない。ちゃんと関係者が協議する場っていうのをなぜ持てないのかっていうような、それはすごく実感として自分たちの実績を感じています。

それで今日お話を聞いて、すごく札幌ではダイナミックなクリーン活動など環境活動されているんだなと感心して聞いていたんですけども。たくさん人が集まってきたので、そこでできれば紙パックを持ってきてもらって、トイレトーパーを差し上げるとかっていうコラボをさせてもらえたらなと思います。

トイレトーパーでしたら、関係企

業にお願いして、何ケースでも協力していただけたと思いますので、6枚持ってきたら1つのトイレトペーパーと交換とか。今、林家カレー子さんという漫才師の方と、年に2回の環境寄席で、そうした企画でコラボしているんですね。そうすると300キロ、枚数で言うと9,000枚ぐらい、2〜3時間でですよ、9,000枚ぐらい集まるんですよ。パックが。それだけファンの方がすごく持ってきてくださるので、なにかイベントの時にはちょっと声をかけていただいて、トイレトペーパーの交換企画をしていただくと、牛乳パックがこんな風になることを知って、もったいないなと思ってもらえるのではないかと。

そういうイベントと絡めさせていただいたら、ありがたいなと思わせて宜しくお願いします。

- 官岡：先程の講演の中でも、やはり事業者の皆さんと市民の皆さんと一緒に取り組んでいくところが重要だという話をしていただけたと思うんですけど、今回このようにコープさっぼろさんと平井さんの紙パックの話をしていただいた通り、やっぱり札幌市単独で全てやっていくというのは難しい状況で、いろんな方との協力のもとに、ごみの減量、再資源化というのは進んでいくのだと思います。

また、講演の方でも知らないといけないということをお話ししたかと思うんですけど、今日のこの講義が気づきの場となればという話をしましたが、やっぱり今回のようにいろんなお話をいただくと、自分にもできることがあるんじゃないかということ、いろいろ気づくポイントがあるかと思っておりますので、こういったところがきっかけになって、どんどん広がっていくと、ゴミの減量、再資源化、進んでいくのかなというふうに思っています。

札幌市の取組評価というところについ



てはですね、札幌市の方で一般廃棄物の処理基本計画として新スリムシティ札幌計画というのを作っています。その計画の中では、一人が排出するごみ量を100g減らしましょうというお声がけをさせていただいてまして、7年度になるんですけど、60gまで減ってきているという状況なんですね。

ちょっと少なそうに聞こえるんですが、実は今年度のごみ減量が大きく進んでまして、かなり減ってます。12月ぐらいの推計値でいうと80%ぐらいまで来ているので、大体目標ぐらいまで来ているという状況なんです。

ただ、当然この後どうなるか分からないので、また数値が下がったり高くなったりするかもしれませんが、そういう意味でもこういった取り組みがいろいろと広がって、目標が達成できるぐらいまで進んでいるという状況になっているかと思えます。

- 石塚：皆さんからたくさんのご質問をいただき、講師の方に、丁寧に答えていただきました。

少し、時間をオーバーしましたが、この辺でトークディスカッションを終了させていただきますが…

最後に、なんと質問カードに私のこの服を褒めて頂いた方がいらっしゃいます。

『これは着物ですか？』、そうなんです着物です。私は作れませんので、作ってあるものを買いました。着物、本当にもったいないですよ。どんどん活用できればと思っております。

ということで、この後は皆様お楽しみのお抽選会がございますので、もうしばらくお待ちいただきまして、本日、3人の講師の皆様、本当にありがとうございます。

(おわり)



さっぽろスリムネット